

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第4番ト長調、作品58

ベートーヴェンの中期の傑作で、ヴァイオリン協奏曲と同じく、ベートーヴェンには例外的に温和な性格を持つ。形式的にも簡潔で無駄がなく、より有名なピアノ協奏曲第5番「皇帝」よりも高く評価する人も多い。1808年12月にベートーヴェン自身のピアノで初演された。曲は以下の3つの楽章よりなるが、第2楽章と第3楽章は切れ目なしに続く。

第1楽章：アレグロ・モデラート

第2楽章：アンダンテ・コン・モート

第3楽章：ヴィヴァーチェ

この曲には次の2種類の録音が残されている。

1. 1943年10月31日～11月3日、
ベルリンpo.、ハンゼン(p)、
ベルリン、フィルハーモニー(L)
2. 1952年1月19日、
ローマ・イタリア放送so.、スカルビーニ(p)、
ローマ(L)

1,2ともにこの曲にふさわしくロマンティックな演奏だが、その表現の徹底ぶり、オーケストラの質感、音質の点でこのディスクの1が圧倒的に優れている。ハンゼンの独奏は非常に个性的でテンポの揺れも多いが、それにビタリとついて行っているフルトヴェングラーの指揮も素晴らしい一語につきる。

ベートーヴェン

交響曲第5番ハ短調、作品67

この交響曲はベートーヴェンの作品のみならず、古今のクラシック名曲の中でも最も有名なもので、特に第1楽章冒頭の運命の動機は、もはや知らない人はいないほどである。耳の病で一度死を決意したベートーヴェンだったが、自らに課せられたその過酷な運命と闘い、再び人々のために筆をとることを決意した。この交響曲には、そういった闘争を経て勝利に至るという、ベートーヴェンの音楽の根幹をなすものが極めて緊密な書法によって描かれている。曲は4つの楽章よりなるが、第3楽章からなだれ込むようにして第4楽章に突入する方法は、当時としては新機軸であった。初演は1808年12月、ウィーンにて。

第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ

第2楽章：アンダンテ・コン・モート

第3楽章：アレグロ

第4楽章：アレグロ

この曲はフルトヴェングラーのこよなく愛した曲であり、以下のように多数の録音が確認されている。

1. 1926年、ベルリンpo.、ベルリン
2. 1937年10月8日、11月3日、
ベルリンpo.、ベルリン、ベートーヴェンザール
3. 1939年9月13日、
ベルリンpo.、ベルリン、フィルハーモニー(L)

4. 1943年6月30日、

ベルリンpo.、ベルリン、フィルハーモニー

5. 1947年5月25日、
ベルリンpo.、ベルリン、ティタニア・パラスト(L)
6. 1947年5月27日、
ベルリンpo.、ベルリン、DDR放送局(L)
7. 1950年9月25日、
ウィーンpo.、ストックホルム、コンサートハウス(L)
8. 1950年10月1日、
ウィーンpo.、コペンハーゲン、
オッド・フェロウ・パレス(L)
9. 1952年1月10日、
ローマ・イタリア放送so.、ローマ(L)
10. 1954年2月28日、3月1日、
ウィーンpo.、ウィーン、ムジークフェラインザール
11. 1954年5月4日、
ベルリンpo.、パリ、オペラ座(L)
12. 1954年5月23日、
ベルリンpo.、ベルリン、ティタニア・パラスト(L)

以上、12種類も存在するが、1はフルトヴェングラーの最初の録音(ドイツ・ボリドール)という記念すべきものだが、電気録音初期ゆえに音質の点では最も劣るが、それでもフルトヴェングラーらしいスタイルははきりと聴き取ることが出来る。2はHMV(EMI)録音のSP録音で、その当時は最高名盤と言われたものである。10は有名なEMI(HMV)のスタジオ録音であり、この中では

最も音質が良く、現在でも代表盤と言える。5,6はフルトヴェングラーが戦後ベルリンに復帰した際のライヴで、10とは全く正反対の、荒れ狂った演奏である。

その5,6に肉迫するのがこのディスクの4である。これは時にライヴと表示されることもあるが、正確には聴衆不在の放送録音である。空襲で破壊された旧フィルハーモニーは“ジュピターの輝き”と呼ばれたほどの優れた音響効果を持っていたが、それがこの4でも十分に聴き取ることが出来る。

2012年5月 平林直哉